

2019. 7. 14. 聖霊降臨節第6主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書3章21-38節

『アダムからイエスまで』

今朝朗読された聖書箇所は主イエスの洗礼と系図が記されているところです。事前にお読みになってきた方も、今日の聖書箇所は読みづらかったのではないかと思います。系図だから当たり前といえば当たり前なのですが、名前だけが延々と連なり、しかも知らない名前も多く、関心の持ちようがない、と思った方もいるでしょう。

さらに不思議なのは、なぜここに系図が出てくるのか、ということです。マタイ福音書のように、冒頭に出てくる、というのならまだわかるのですが、「順序正しく書く」といっているルカが、なぜ主の洗礼に続いて、ここで系図を書いているのか、ということがわかりにくい。洗礼と系図とは関係があるのか、そういう疑問も起こってきます。

ルカの描く主の洗礼は、まことに簡潔、短いものです。「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降ってきた。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適うもの』という声が、天から聞こえた。」主イエスがなぜ洗礼を受けられたのか、ということの後でお話しするとして、洗礼を受けた後、聖霊が降り、神のみ声が聞こえた。この神の言葉は、洗礼を受けたことで、神の御子になった、という意味ではもちろんありません。ルカはここまでクリスマスの出来事を丁寧に語ってきたのです。そうではなく、神はここで、イエス・キリストは誰であるのか、主が伝道の歩み始めるにあたって、宣言されたということです。そして主イエスの宣教の歩みの上には聖霊が降ってその歩みと共にあるということがここで語られているのです。

その主の宣教の始めに系図が記されている。宣教の始め、主イエスはおよそ三十歳であった、というのです。旧約聖書の民数記には、祭司は30歳からその任に就き、50歳で任から解かれる、定年だということが記されています。30歳まではその準備の期間、学びの期間だったのです。祭司はそのようにして、30にして立った。主イエスもまた、30にして宣教の歩みを始められました。ある人が言っているのですが、このルカの記述から確かに想像できることがある。それは、主イエスもまた30に至るまで、学びのとき、教育を受けてこられた。主イエスは赤ちゃんの時からなにかもわ

かって、歩んでいたというわけではない。片言から始まり、言葉を覚え、両親からたくさんのお話を学び、他のユダヤ人同様、律法を学び、信仰の教育を受けたということです。大工の仕事もヨセフから学び、叱られたり、小言を言われたり、たくさんのお話を学び、成長した。そして30歳になり、宣教の歩みを始めた、のです。そしてこの系図に、こうあります。「イエスはヨセフの子とされていた。」今度の新しい訳では「人々からはヨセフの子とされていた」とあります。どうしてルカはこういうことを書いているのか。確かに、主イエスは神の子、神の独り子です。けれど同時に、主イエスご自身、ヨセフを自分の父親として受け入れ、父と子の関係の中で生きてきたのです。それは人々からすれば、ただただイエスはヨセフの息子だった、というのです。神が独り子をこの世に与え人となられた、ということは、そのようにして人として育てられ、一人の信仰者として育てられたものとして、歩んでいかれることで、神のまことに不思議な恵みなのでしょう。

そして系図が始まります。「ヨセフはエリの子、それからさかのぼると、マト、レビ、」という具合に延々続きます。この系図の翻訳ですが、原文は「人々によれば、子、ヨセフの、エリの、マトの、レビの・・・」となっています。つまり、この文章は、イエスはヨセフの子、ヨセフはエリの子、という具合に読むこともできるのですが、イエスはヨセフの子、イエスはエリの子、イエスはマトの子、という具合にも読んでいけるのです。つまりここに名前が出てくる一人一人がイエスにかかわりを持ってくる、連なっていくのです。

事実わたしたちは、聖書の中で、主イエスのことを人々がダビデの子、と呼んだことを知っています。もちろん、ダビデはイエスの父親ではないことはわたしたちは知っています。しかし聖書はイエスをダビデの子と呼ぶのです。ダビデの子孫という意味がありましょう。しかしそれだけでない、最も深い意味が込められている。ダビデもイエスにつながっている、ということです。

とにかく系図を読んでみます。知っている名前もあります。ダビデ、エッサイ、ボアズ、ヤコブ、イサク、アブラハム、と何人かいます。しかし、ほとんどの人は知らない。まったく名前を聞いたこともない、という人がたくさんいます。それにダビデの息子のソロモンの名前がない。マタイ系図に載っている人で、ルカの系図に載っていない人がいる。もしこの系図がイエスの血筋を誇ろうとするものなら、ダビデ王家から続く、ソロモンをはじめとする王たちの名前を挙げるべきでしょう。ところが、この系図には学者たちも誰なのか特定できない人々が載っている。つまり有名な人もいるが、無名人たちもいる系図なのです。そもそもルカはイエスの系図を立派な家系の系図にしようなどとは全く考えていない。

有名・無名な人たちが織りなすこの系譜の中に主イエスの名を置き、その人々が一人ずつ主イエスに結び付けられていく、それがルカがここで書き留めたかったことなのです。系図といえば、血筋を誇示するようなものとして、捉えている人は少なくない。あの人の家系は優秀な人が多く、先祖には誰々がいる、立派な家系だ。

逆に、先祖とか血筋なんか、誇ろうにもうちには何もないよ、ということにもなる。そういうとらえ方がわたしたちの中に抜きがたくある。しかしルカはイエスの系図をそのような視点ではまった捉えていない。

系図に載った多くの人たちのしたこと、その語った言葉は、歴史の彼方に消え去ってしまった。誰も何も覚えていない。誰も思い起こさない。そうした誰も何も覚えていない、思い起こさない人々によって織りなされた系図がはるかに辿られて、その最初のところにアダムがたっています。

系譜といっても、四代、五代とたてば、何もわからない。「つながり」といえるほどのつながりがあるとも思えない。アダムと、メルキ、アダムとヤナイ、と取り上げてみれば、わかるように、ほとんど系図上でしか接点がない人の広がりなのです。ところが、ルカが記すこの系図はイエスからさかのぼって、アダムという最初の人間へと向かう系図なのです。するとこの系図は、アダムから始まった人間の歩みが、一筋、糸のようにして主イエスにつながっていることを示す系図であることに気づかされていきます。いや、イエスがこの系図に名を置くことにおいて、これらの人々はつながっていくのです。

わたしたちもやがて忘れられていきます。わたしを知る人は、この地上には誰もいなくなる。誰も思い起こさない。その忘れられていく歩みの中で、しかし、アダム以来のいのちの流れがつくられる。それは主イエスがこの系図に名を置き、主イエスがこの系譜の中に身を置くことによって生まれるいのちの流れです。

アダム以来の系譜はただ忘れられるというだけではない。アダムが犯した神への罪、その罪はこの系譜の中で、脈々と流れている。罪がこの系譜の中を貫通しているといえる。その意味で、この系図の人々は、待ち続けた人々の系譜といえるのです。人間の底を流れる罪はもちろん、人として生きることの痛みや苦しみが贖われることを、待ち望んでいる人々の系譜です。そこからの救いを意識無意識にかかわらず待ち望んでいた人々の系譜なのです。

38 節の最後のところ、セト、アダム。(句点)そして神に至る。とあります。これは整えた訳で、原文は「セトの、アダムの、神の」となっていて、それで終わりです。先ほども言ったように、セトはアダムの子、アダムは神の子、というふうにも読める。ところ

が創世記を読むものにとって、アダムと神とがそれほど近いものとは感じられない。アダムは自分から神の言葉を破り、樂園から出て行った。アダムは人間、神は神。神と人間は深く遠く隔たる。せいぜいのところ、創造者と被造物の関係です。

しかし、そのようなアダムがここで、アダムは神の子、と語られているのです。それはイエス・キリストの故なのです。イエス・キリストがこの系譜に連なる者たちすべてを神の子としてくださるからなのです。

イエス・キリストは本来、わたしだけが神の子なのだ、といいうる存在です。そのイエス・キリストがアダムに至るこの系図に連なるものを掬い上げるようにして、その系列を神とつなげ、結び付けてくださるのです。

主は人の子として育ち、教育を受け、信仰の学びをし、洗礼を人々と同じように受け、ヨセフの系図に連なるものとして、歩んでこられた。そして聖霊を受けて、宣教の業がこれから始まる。十字架に向かう歩みが始まるのです。それはこの系図に登場する人々を掬い上げて、神の繋げ、神の子とするためでした。だからルカはここに系図を書き記したのです。それが系図の意味なのだ、とここで語り始めるのです。だからこそルカにとって洗礼、聖霊降臨、宣教、系図と続くのです。

主イエス・キリストには子どもはいませんでした。ですから普通の意味で言えば、この系図は、ここで終わることになります。しかし、この系図は終わらない。主の宣教により、十字架と復活により、聖霊の働きにより、この系図は大きく、広く豊かにいのちのつながりとして広がっていくのです。

D a t a : 聖霊降臨節第6主日礼拝式説教

讃美 : 前277、後522

新生教会礼拝堂